

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅看取り患者の「食」と「死生観」について ; 「グリーフケアアンケート」からの考察
演者名	千場純、山崎博史、枝久保安正、堀越美紀、横田陽子、小林知美
所属	三輪医院 (神奈川県横須賀市)

目的>

在宅看取りの患者遺族に行うグリーフケアを単なる儀礼的なものや情緒的なもので終わらせないために、残された数少ない日々を故人がどのような思いで過ごし、どのように食べ、そしてどのように死と向き合ったか？などを振り返り、「食」と「死生観」に関しての故人、あるいは遺族の思いを確認する。

方法>

平成 24 年 4 月～平成 25 年 12 月の死亡患者総数 92 名のうち、連絡先が判明している患者遺族 70 名に、グリーフケアカードと合わせて、以下の項目についてのアンケート[グリーフケアアンケート]を送り、無記名で郵送回収した。故人の①病状理解程度 (VAS)、②予後理解程度 (VAS)、③一番辛かったこと、④食事がとれなくなった時期、⑤最後まで食べた調理方法、⑥同じく食材、⑦お迎え現象の有無、⑧故人及び⑨遺族の死後の世界への認識。

結果>

有効回答回収は 60 件。各項目の回答概況は以下参照。

① $56.4 \pm 34.8 \text{ mm}$ [median=66.0mm] ② 48.2 ± 34.0 (median=50.5mm) ③体の痛み、家族との別れ、迫り来る死…、④71.9%が死亡前 1 か月以内、⑤煮物、刺身、蒸し物の順…⑥果物、野菜、魚の順…⑦「あった」または「あったかもしれない」合わせて 37.3%、⑧「ある」が 23.9%、⑨「ある」が 43.3%

考察>

通常、患者遺族にとって、故人への思いは感傷的かつ漠然としたものであるが、今回の「グリーフケアアンケート」は介護者としても最も重大な関心事である「食」や「死」に対する具体的な回想を通じて、故人の苦悩や死生観を実感出来る効果があると思われ、単に遺族を慰める意義以上に、死の受容や認識を啓発する効果も期待できるのではないだろうか？その際「死後の世界がある」という認識が、当該故人及びそれ以上に遺族にも認められた点は、在宅看取りに臨む職能団体としての我々も今後改めて認識すべき点であるといえよう。